自己呈示欲求が対人ストレスコーピングに与える影響

—方略選択の認知を媒介する3つのモデルの比較—

○川口ことみ・佐々木淳

(大阪大学大学院人間科学研究科)

キーワード: 自己呈示、対人ストレスコーピング、方略選択の認知

The influence of motivation of self-presentation on interpersonal stress coping

Kotomi KAWAGUCHI, Jun SASAKI

(Osaka University)

Key words: self-presentation, interpersonal stress coping, cognitive process.

問題と目的

対人関係に関する重要な概念として、自己呈示、対人ストレスおよび対人ストレスコーピングが挙げられる。加藤(1999, 2000)は、対人ストレスコーピングについて、積極的に相手との関係を改善しようとするコーピング方略が、他者から好意的に評価されるよう自己の行動を統制しつつ他者に対して積極的に交わろうとするパーソナリティに支えられていること、またストレスフルな関係を問題視せず時間が解決するのを待とうとするコーピング方略は、自ら傷つくことも相手を傷つけることもなく希薄な対人関係を望む現代青年に特徴的な方略であることを示唆している。以上から、対人ストレスコーピングの性質は、自己呈示の特性である賞賛獲得欲求および拒否回避欲求との関係の中で説明できると考えられる。そこで本研究では、対人ストレスコーピングと賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との関係を検討し、さらにコーピング方略を選択する際に行う認知が両者の関係をどのように媒介するのかを明らかにすることを目的とする。

方法

調査対象: 大学生 272 名を対象に質問紙調査を行った。

調査材料: 質問紙には、対人ストレスコーピング尺度(加藤, 2000)、コーピング選択にかかわる認知の尺度(鈴木, 2006)、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度(小島・太田・菅原, 2003)を使用した。対人ストレスコーピング尺度は「ポジティブ関係コーピング」、「ネガティブ関係コーピング」、「解決先送りコーピング」の3因子、コーピング選択にかかわる認知の尺度は「肯定的結果への期待」、「情動調整への期待」、「習慣行動の選択」、「消去法的選択」の4因子、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度は「賞賛獲得欲求」、「拒否回避欲求」の2因子で構成されている。

結果

対人ストレスコーピングと賞賛獲得欲求・拒否回避欲求の各下位尺度間の相関係数を検討したところ、ポジティブ関係コーピングと賞賛獲得欲求との間に有意な正の相関が見られた($r = .32, p < .001$)。しかし、ネガティブ関係コーピングに関しては有意な相関は見られず、解決先送りコーピングに関しては賞賛獲得欲求($r = -.12, p < .05$)、拒否回避欲求($r = -.17, p < .01$)の間にそれぞれ弱い負の相関が見られた。

次に、対人ストレスコーピングの3つの方略群に関して、賞賛獲得・拒否回避の両欲求およびコーピング選択にかかわる認知がどのように関わっているか、パス解析を行いモデルの妥当性を評価した。その結果、ポジティブ関係コーピングに関してはモデル1($GFI = .987$, $AGFI = .946$, $RMSEA = .060$)、ネガティブ関係コーピングについてはモデル2($GFI = .995$, $AGFI = .979$, $RMSEA = .000$)、解決先送りコーピングについてはモデル3($GFI = .964$, $AGFI = .873$, $RMSEA = .120$)を採用した。

考察

相関係数の検討の結果、賞賛獲得欲求が高い場合はポジティブ関係コーピングを使用することが明らかになった。つまり、他者からの賞賛を得たいという欲求を持つ者は、他者との関係を積極的に改善しようとするコーピング方略を選ぶ傾向があると言える。一方、ネガティブ関係コーピングおよび解決先送りコーピングに関しては自己呈示の性質が含まれていないことが示唆された。

またパス解析の結果、賞賛獲得欲求とポジティブ関係コーピングについてのみ、肯定的結果への期待という認知が媒介し両者の関係を強めていた。一方、新たな知見として、習慣行動の選択および消去法的選択という認知においてネガティブ関係コーピングを使用する傾向があった。つまり、習慣的あるいは消去法的に他者との関係を放棄・崩壊するようなコーピング方略を用いていると言える。この点から現代青年の社会的スキル不足という問題が伺える。今度こうした問題に対処するために、コーピング選択にかかわる認知の変容に焦点を当てたストレスマネジメント・プログラムや、社会的スキル訓練の適用などの介入の効果を検討する必要があるだろう。

引用文献

- 加藤 司 2000 大学生用対人ストレスコーピング尺度の作成 教育心理学研究, 48, 225-234
鈴木伸一 2006 コーピング選択における認知過程の検討 心理学研究, 76(6), 527-533

Figure1. 3つのコーピング方略群に関するパスダイアグラム

左からモデル1、モデル2、モデル3である。PC: ポジティブ関係コーピング、NC: ネガティブ関係コーピング、RC: 解決先送りコーピング